

Kohlberg 理論における道徳性の発達に関する一考察

—R. S. Peters および W. James を通じて—

鈴木 孝*・福崎 淳子**

(昭和61年9月29日受理)

A Study on the Development of Morality in L. Kohlberg's Theory

—Based on the R. S. Peters' and W. James' Theories—

Takashi SUZUKI and Junko FUKUZAKI

(Received September 29, 1986)

はじめに

道徳性や道徳的行動に関する心理学的な研究の方向は、①精神分析学的理論 ②社会的学習理論 ③社会心理学的理論 ④認知発達の理論の4つの立場から論じられてきているといわれる¹⁾。本論〔I〕では④に属する Kohlberg の理論に視点をあて、前論²⁾で指摘した Peters による Kohlberg 理論の批判を通じ、道徳性の発達を考察し、〔II〕では Kohlberg・Peters を内包するものとして James をとりあげた。

〔I〕

①は Freud, S. の論ずる精神構造を問題とし、Es. 自我 (Ego), 超自我 (Super Ego) がバランスをとって発達することが精神的成長であるとする。罪の意識や後悔の恐れなどから、超自我が始原的欲求にブレーキをかけることにより道徳的行動へと導かれると考え、個人の内に社会的規範を確立していく。②に属する理論としては、Bandure, A. の良心を問題とする研究があり、誘惑への抵抗力 (resistance to temptation) と罪悪感の欠如について追究している。③は他との関わりの中で生じる道徳的行動の変化に関心が注がれており、Hoffman, M. L. などによる愛他的行動の研究と深くかかわっていると中里³⁾は述べている。愛他的行動に関する研究は、賞罰により形成されると考えた学習心理学的側面からの追究もみられたが、他との関わりの中に賞罰だけでなく、感情という側面も加わることを中里は指摘している。④に代表されるのは、Piaget, J. の理論を

引き継いだ Kohlberg, L. の道徳的判断における発達段階説であり、Kohlberg は道徳的行動よりも判断の思考過程に重きを置いている。

このように様々な立場から論じられる道徳ということばの一般的定義は「人のふみ行なうべき正しい道、良心や社会の規範を基準として自分の行為、考えをきめ、善や正を行なわせる理法、行為」⁴⁾とある。人のふみ行なうべき正しい道とはどういうことかと追究すると、単に社会的ルールを守るということのみならず、そこには奥深い価値への問いかけがあろう。

秩序という名のもとに規則が作られ、倫理が生まれる。倫理は社会のすべてを支えていると考えられるが、人間の内面にある価値の基準により倫理観も変化しうらう。それは時代的な変化によるものか、精神性の発達のためなのか、あるいは新しい倫理を求める人間の欲望なのかといくつかの疑問が生じてくる。だが、価値の基準が道徳的な判断の発達に何らかの形で関与しているといえよう。

1) Kohlberg は道徳性の発達について、三つのレベルを設定し各レベルを2段階ずつに分けた6段階の道徳判断の発達過程を示した。価値的問題意識をどこに置くかにより、各段階における道徳的な判断の質が変わってくると考えられる。

Kohlberg の発達のな特徴について山岸は次のようにまとめている。「発達とは認知構造の変化、質的变化である。個人は道徳規範を単に受動的に内面化するのではなく、能動的に対処し、自分の認知構造にあうように同化するものであり、同化の仕方、理解の仕方が発達上の問題である。認知の変化は個人と社会的環境との相互作用によりひきおこされる不均衡が均衡化される過程であ

* 教育哲学研究室

** 日本女子大学児童学科研究室

る⁹⁾。すなわち Kohlberg は発達について受身的ではなく、自発的に認知構造を進展させていくべきとしている。しかし発達の次に段階へ進むという心理学的理論と、哲学上の価値として何故より高い発達段階の方が良いのかという哲学的理論との解釈についても Kohlberg は問いかけは始めている。彼はこの2つの理論を「異なる方向に展開された同一の理論」⁹⁾と述べており、これからの道徳教育において心理学的思考と哲学的思考の2側面の必要性を主張している。

発達の展開だけでなく、哲学的な意味での倫理性にも視点をあてなくては、単に発達の段階を述べるだけに終わってしまう恐れがあるからだろう。Kohlberg 理論の難しさは、このような二つの学問的理論の追究にあるのではないだろうか。この問題を念頭に置きながら Kohlberg 理論について説明しよう。

まず Kohlberg は道徳性の発達について文化的な相対主義を否定している。彼いわく「同じ基本的道徳概念があらゆる文化において用いられるばかりでなく、発達の段階もすべての文化において同じである」⁹⁾さらに「不変の順序で発達する普遍的な人間の様式あるいは道徳的思考の原理がある」⁹⁾としている。このような文化的相対主義否定のもとに、彼は6段階の発達を次のようにまとめている。⁹⁾

A 前慣習的水準 (Preconventional Level)

第1段階：罰 (punishment) と服従 (obedience) の段階

規則や権威に服従する段階で、罰を回避し物質的ダメージを避ける。また自己中心的思考であり、他に関心が無い。

第2段階：道具主義的 (instrumental) 目的 (purpose) と交換 (exchange) の段階

自分自身あるいは他人のニーズを満たし、具体的な「交換」という点で公平な処置をする。自己の関心やニーズに応じて行動する利己主義的な考えをもっている。

B 慣習的水準 (Conventional Level)

第3段階：望ましい対人関係 (relationship) と遵法度 (conformity) の段階

良い役割を演じ、他や他の感情を気使い、忠義、信用を重じ、規則に従う。この段階は人が期待しているようにふるまおうとするいわゆる良い子志向である。利己主

注) Kohlberg は BレベルとCレベルの中間段階としての移行期を設定し、それをB/Cで示している。

義的な考え方は越えているが、一般的な組織的なつり合い (perspective) は考慮しない。

第4段階：社会的組織 (social system) と良心 (conscience) 維持の段階

自分の義務を遂行し、社会的秩序を守る。一般的に認められる義務を遂行し、法に従い組織的立場から対人関係を考える。

B/C¹⁰⁾ 移行水準 (Transitional Level)

まだ原理的水準ではないが慣習的水準を越えており、4½の段階と考える。

個人的、主観的であり、良心は任意的で相対的である。義務や道徳的正義の考え方に基づいて行動する。自分自身の社会から脱しているが、一般的行為や社会契約を必ずしも考えずに個人的な解決をする。責任は果たすが特別な社会に限定されており、原理的でない。

この段階の設定については、はじめ Kohlberg は第5段階へ進む前に自己中心的な快樂主義が生じると考え、それらを第3あるいは第2段階への退行 (regression) ととらえた。しかしこの現象が高い教育を求める大学生によくみられており、彼らが低い水準の決定を見直し、これらから脱しようと思案しているものと考えた。すなわち Kohlberg は、彼らがメタ倫理学「正しい規範は何かを問う場合の考え方について考察する学問」¹⁰⁾的なとらえ方をしているのであり、彼らの考えは青年期における抽象思考の発達に関与するものと考えた。そして第2段階とは質的に異なるものとし、第4段階から第5段階への移行期としてこの段階を設定した。¹¹⁾

C 慣習的以後、原理的水準 (Postconventional and Principled Level)

第5段階：正義 (rights) と社会的契約 (social contract) あるいは効用 (utility) の段階

基本的な正義・価値・社会の法律的な契約を支持する段階である。法や義務はすべての効用の道理にかなった考え方に基づいている。最多数のための最大幸福 (the greatest good for the greatest number) を主張する。道徳的な見地、法的な見地でものごとを考え、conflict の生じることも認め、統合する (integrate) ことの難しさをも感じることができる。

第6段階：普遍的 (universal) 倫理的 (ethical) 原理の段階

この段階は、普遍的倫理的的原理によって導かれる。原

理は普遍的な判断の原理である。すなわちそれは人間の権利の平等であり、人として人間の品位に対する尊敬である。道徳的観点でのつり合い (perspective) を保っており、この perspective は道徳性を認める理性的人間、あるいは手段でなく目的として人を敬うことを前提とした基本的道徳である。

以上の6段階が Kohlberg の主張する道徳的判断の発達過程の概要である。この理論が Piaget の認知発達理論の影響を受け継いでいることはいうまでもない。Piaget の発達段階はまず大きく二つに分け、2才までの感覚運動の段階とこれ以降の概念的な段階とが示されている。さらに後者は、①前概念的段階 ②直観的段階 ③具体的操作の段階 ④形式的操作の段階に分けられている。形式的操作の段階は11才ごろから14、15才ごろに完成されるとしているが、Kohlberg の道徳的判断の段階で、特に第5・6段階の原理的水準に関しては、Piaget の形式的操作の段階以降の青年期の発達も含まれると考えられる。Kohlberg による原理的水準は非常に抽象的な思考に基づいており、青年期に発達する抽象思考と深く結びつくものといえよう。

Piaget 理論との対応については、Lee, C. L.¹²⁾ を始めとし多くの研究者によりなされているが、山岸は次のようにまとめている。具体的操作段階以前、すなわち前概念的思考及び直観的思考の時期は、自己の欲求に基づいた道徳性でありゼロ段階としている。具体的操作期は Kohlberg の示す第1段階、第2段階、形式的操作期は第3段階以降とし、第5段階あたりまでが Piaget の示す形式的操作期としている¹³⁾。Kohlberg は原理的水準にあるものは高い水準の形式的操作が必要と考えている。しかし逆に形式的操作期にある者が必ずしも原理的水準にあるとは限らないとする Keasey, C. T. らの研究から「認知能力は道徳性発達の必要条件だが十分条件ではない¹⁴⁾」とする Kohlberg の仮設の支持されたことも山岸は示している。

このように Kohlberg の理論は、他律から自律へと進む Piaget 理論を受け継いで確立されているが、彼が何よりも重きを置いた点は、ある問題提起に対し、結果的にどう行動するかではなく、どうしてそのような結果を導き出したかの思考過程を大切にしていることである。つまり Why に対する Because に注目しているのである。この Because の解釈の手段として、彼はある問題から生じるモラルジレンマを提示し、どう対処す

るかにより、道徳的判断の発達を考えた。

ここでは特によく用いられる「Heinz のジレンマ」¹⁵⁾ の大筋を紹介しよう。

ある女性が特殊なガンのために死にかけていた。この女性を救うことができるかもしれない薬がひとつだけあると医者は考えた。それはある薬剤師が最近発見したものであり、薬を作るのに要した費用 (\$200) の10倍 (\$2000) という高額な値がつけられていた。この女性の夫である Heinz は知る限りの知人からお金を借りたが、その薬の半分にしかならなかった。そのため Heinz は薬剤師に、自分の妻が危篤の状態であることを告げ、何とか安くしてもらえないか、あるいは支払いをのばしてもらえないかと頼んだ。しかし薬剤師は、この薬でひと財産を作ろうとしているため安くすることも待つこともできないとして断わった。絶望的になった Heinz は妻の命を救うため薬を盗んだ。

Heinz はそうすべきだったろうか、という問いに対しどこに価値基準を置かかにより判断は変わってくる。たとえ結論が同じであっても理由づけにより価値の意味の深さが異なり、そこに道徳性の発達が示されると Kohlberg は考えた。行為そのものよりも判断の思考過程を重視しているのである。ではこの思考過程はどのように形成されていくのだろうか。

2) 道徳的意識の発達として思考過程の形成について論じるにあたり、Peters の Kohlberg への批評とを併せて考えてみよう。

Peters の道徳教育論については鈴木²⁾によって詳しく紹介されている。Peters は理性主義を軸として、理性 (reason) のもつ sensitization (感光性) に注目している。「理性の形式性とはなにか善でなにか悪であるかを感光する (sensitize) 作用」¹⁶⁾ と述べ、さらに「初期にも一種の感光性 (sensitization) の作用があって、後にそれは理性的道徳的行動に影響する原理として作用する」¹⁷⁾ と主張している。こうした理念のもとに Peters は Kohlberg 理論をも重要なものとしてとらえているが、いくつかの疑問を投げかけている。「Kohlberg は道徳発達に対しあまりにも単純に、そしてあまりにも一元論的なアプローチをとっている」¹⁸⁾ という辛辣な批評もみられる。彼はかなり細かい指摘を行なっているのだが、本論では、特に Peters の道徳論で重要視している「sensitization」の視点から論じていきたい。

Kohlberg は道徳的判断の発達において何を重要視

したのであろう。彼は次のように述べている。「認知発達理論は相互作用の (interactional) なものである。…略…基本的精神構造は有機体と環境との相互作用のパターンにより生まれる」¹⁹⁾ 彼は認知能力を重視し相互作用とさらに役割取得能力 (role-taking) の2つを重要なものとしてあげている。

道徳判断の段階については、これらの能力の発達に伴ない、一段一段と順序立てられて進み、段階をたび越えることはないとしている。「発達段階が不変の順序をもつ系列であるということは段階の間に論理的な順序性があることを意味している。第3段階は第2段階を包含するが、第4段階を包含してはならない。…略…高い段階の道徳性は少なくとも低い段階の道徳性を包含しているが、その理由は高い段階の道徳性は低い段階の論理的構造を内にもつ高い段階の論理構造を含んでいるからである」²⁰⁾ と述べている。彼は順序立てられた発達の段階にそって道徳的判断が形成されていくとし、究極的には、最も高いレベルにある原理的水準の第6段階に目標を置いている。そして発達段階が「神経組織に組み込まれる順序を体現しているのではない」²¹⁾ とし、さらに発達段階において「反応の様式は質的な変化を表わしていなければならない」²²⁾ と主張している。冒頭で述べたように Kohlberg は発達を不均衡が均衡化される過程であると考えたが、同時に、そこには質的な変化も重視した高い精神性を追求している姿勢があるといえるだろう。

また彼は「心理学的分析と哲学的分析は、より高い道徳的思考の段階が構造上一層適切であることを示している」²³⁾ ともいっている。では最高段階にある原理的水準へ向かわせるものは何か、という思考過程の形成に関する説明になると、あいまい性がある。このあたりが Peters の指摘するところなのだろう。

発達の初期段階について Peters と Kohlberg は、各々次のように述べている。

Peters は「発達の初期の段階において可能な方法によってもたらされる習慣の獲得が、理性的な規則の順守の様式へと発達していくはずである。…略…子どもは人生の初期では、規則と原理から取り出される考慮を結びつけることはできないかもしれないが、後に原理として役立つであろう考慮に敏感になることはできるのである」²⁴⁾ と主張している。Kohlberg は「人生の初期の数年間には、彼らは理性的なあり方で規則を受け入れたり、あるいは原理を理解する能力に依存している説明や説得

のような過程によって規則を教わることはできない」²⁵⁾ としている。ここに Peters と Kohlberg の初期段階での道徳性の発達過程における視点の違いがあるのだろう。

Peters は初期の段階に潜む sensitization を重要視しており、Kohlberg の第4段階から第5、6段階の発達に関し説明の不十分さを指摘している。Peters にとっては、この sensitization が後に重要な役割を果たす道徳性の鍵と考えているのだろう。

だが、Kohlberg も前述のように前段階の道徳性を次の段階は包含しているとしている。ではここで Carter, R. E.²⁶⁾ の Kohlberg 理論をもとにした図を示そう (図1)。図では、7段階目も描かれており、それ

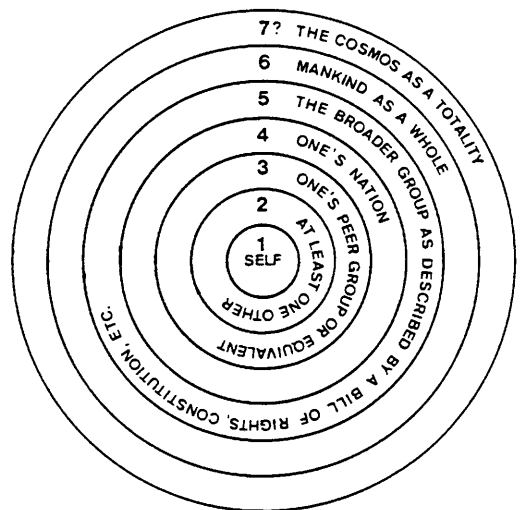


図1 Kohlberg理論における道徳性の発達段階

(Carter, R. E., 1984)

は完全なる宇宙の秩序とされている。図より高いレベルにある原理的水準は初期段階の道徳性である前慣習的水準も含んでいることがより明確化され得る。一段階ずつ進む発達過程において、各々次の段階へ移行するための刺激となる要素が存在する可能性を読みとることもできよう。しかしかなる要素かを具体的に述べることは難しい。Peters が sensitization ということばでその存在を表現していることは、ある意味で Kohlberg のあいまい性を鋭く批判していると同時に、理論の深さを強調していることにもなる。それだけ道徳性は抽象性を含む哲学的な側面を含んでいるといえるのだろう。だからこそ Kohlberg は道徳性の発達を心理学的な立場から

だけでなく、哲学的な立場からも解釈しようとしているといえよう。

さて、Denney, N. W. と Duffy, D. M.²⁷⁾は、母親と子ども（6才～14才）の道徳性に関する研究で二者間にかんがりの相関を示していることを報告している。ここでは、環境的な要因が道徳的発達に関わりうる原因をもつものとして無視されるべきでないとして述べている。しかし、いかなる要因かを具体的に立証することはできないとし、母親は子どもたちに経験を通じ彼らが理解できるように、彼らの発見に説明を与える単なる仕立役であるという論争がいつも存在しているといっている。だが子どもは、母親から道徳性の判断を学びとっていることは明らかであり、二者間には大きなかわりのあることを強調している。

このように初期の段階において後に形成されうらう能力の具体的な要因を直接的に示すことは難しい。様々な要因が絡み合って能力を引き出すきっかけとなるのだろうし、その絡み合いは決して単純なものではないことは明らかである。しかし、何らかの形で影響をもっていることは Denney らの証明するところであり、Peters は sensitization として表現している。そして Kohlberg は empirical abstractions であるが、高い段階が低い段階を含むという表現でその意味するところを語っている。

Denney らは前述の研究の結果として、被験者の反応を Kohlberg 理論の3レベルに分けた分析において「子どもの年齢が高ければ高いほど道徳的判断の水準も高い」²⁸⁾と年齢的な発達も指摘している。これに対し Kohlberg は次のような考えも示している。「青年になるまであらゆる道徳的、社会的刺激を受けてこなかった子どもでも、おそらく青年になって原理に基づいた論理的思考、すなわち形式的操作の論理的思考を獲得することはできるだろう」²⁹⁾ Kohlberg 理論は Piaget 理論をもとにした発達段階を述べてはいるが、一定の年齢と必ずしも対応しない場合のあり得ることを指摘している。しかし、彼は年齢とは別に第1段階から一定の順序で進むことが発達の基本的な大前提としている。何故なら上述のような青年の場合であっても「認知上の原理は普遍的な原理に基づく道徳的思考に自動的に反映されるわけではなく、発達段階のすべての段階を初めからたどらなければならない」³⁰⁾と加えているからである。

このように Kohlberg の主張の中には、直接的では

ないが、各段階に次の段階の思考過程へと発展する要素が裏側に潜んでいる可能性を含んでいるといえよう。そして発達が年齢的な対応だけでなく、順序立てられた一定の流れのあることを重視している。各段階を歩む過程の中に次の段階へと押し進めるものがあることを根底に置きながらも、発達の要因の説明は抽象性をおびている。その解釈として、心理学的、哲学的な2つの立場からの考察を重視してはいるが、より高い道徳的思考の重要性を「構造上一層適切である」³¹⁾という表現にとどめている。

道徳性の発達段階について「子どもの属する文化のなかで、言語によって伝えられる価値や規則を単に学習することではなく、発達においてより普遍的なもの、どの文化でも生じるものに焦点を当てていることを意味している」³²⁾とも述べており、道徳的な発達の根底に高い精神性と深い論理性の追求の含まれていることを彼は示しているといえよう。このように Kohlberg は普遍性のもとに道徳的な発達を展開させており、高いレベルへの発達が抽象的表現にとどまるのも無理からぬことと解される。

3) さて、心理学的な発達研究では、初期経験の重要性が様々な視点から報告されている。文化を越えて普遍的なものであるといわれる音楽性に関する研究で、Papousek, M. と Papousek, H.³³⁾は、乳児の初期の音楽経験（主に lullaby）や乳児と caretaker との interaction の重要性を解き、彼らは語彙の内容や全体的な意味に関係なく、与えられた刺激によりことばの抑揚を把握し、音楽における感性をも獲得していくと報告している。Peters の主張する「幼児への言葉のくりかえし (verbalism) を学習の出発点とせよ。なぜそうするかを真に理解しなくても言葉のくりかえしによって何かが習得される」³⁴⁾と通ずる点がある。

では、初期行動を含む思考過程の発達の要因について多くを語らない Kohlberg は道徳性の形成につき、教育という立場からは何を重視したのだろうか。Kohlberg 理論の展望として、道徳教育的な意義について考察したい。

Carter, R. E. は「Kohlberg にとって教化的なやり方での道徳教育は、子どもの道徳的自由の冒瀆 (violation) である」³⁵⁾と述べている。あくまでも大人は子どもの思考の援助者であるべきことを Kohlberg は強調している。確かに道徳が、教化的に身についたも

のであるならそれは単なる条件づけに終わってしまう。高い原理的水準を目標としている Kohlberg 理論において、倫理性の追究はあくまでも条件づけられたものであってはならない。その意味で、彼が道徳判断の発達として結果ではなくその思考過程を重視している点は、道徳性の形成の上で大きな役割を果すことになるだろう。また現場においては、moral discussion という形で Kohlberg のモラルジレンマの課題が応用されつつある。そこでは話し合うことによって道徳性の価値観が高められていく。そして教育という現場において重大なことは、援助者となる教師が高い道徳判断の水準に到達していなければ、援助者にはなり得ないということだ。

Kohlberg 理論は、道徳における段階の発達の定義に終るのではなく、そこが出发点となって、人間の高い倫理への追究が始まるのではないだろうか。Kohlberg の理論の中には Peters の指摘するような「あいまい性」は確かに存在している。しかし Kohlberg が重視した道徳判断における思考過程や教化的教育の否定には、環境の中で思考する人間としての姿勢が問われている。ここに Kohlberg 理論の意義があるのではないだろうか。

〔I〕では Kohlberg の理論の概要とその展望について Peters の批判をもとに論じてきた。彼の理論は確かに Peters が一元論的と批判するように、道徳論に一定の枠があり、発達の要因の説明にも不明確さはある。しかし、道徳性が心理学的、哲学的な2方面からの追究を要し、人間性を鋭く問う課題を含んでいると指摘していることは明らかであろう。

〔II〕

以上、Kohlberg の立場はあくまでも心理学としての行為の可能性を探るものである。道徳的価値判断としての彼の説く最終段階は、最終的には心理学と哲学の狭間へとせまっていくであろう。哲学の主観と心理の客観にギリギリに追いつめられて波動するフィラメントに、真実の影をみることができないであろうか。その意味で Peters 論³⁶⁾に続いて Kohlberg を考察することによって、道徳判断のなんらかの手がかりが得られることを期したのであった。

しかし、両者の接点は空としてつかみえないとの実感あるのみといったらどうであろう。Peters の sensitization. Kohlberg の「最終段階としての普遍性」ここ

で何を意味するのであろう。むしろ私は、William, James にもどることによって両者の接点を改めて考察しうるのではないかという反省的考察を提唱したい。

道徳的意識を経験的に扱うという点では Peters も Kohlberg も同一である。ただ、Peters には、むしろ、アプリアリに“sensitize”の能力が考えられていた。Peters では Kohlberg の発達段階を認めながらも、初期の段階から経験の断片を可能にする“x”が認められていた。Kohlberg は三つのレベルにおける6段階から道徳的意識の発達を説いたが、各レベルは帰納的直接的に説明されていた。しかし、ego-centric や good boy morality を越えていかに autonomy のレベルが可能であるかが問われれば、Kohlberg は経験がうみだす人間相互関係がすべてを生みだすというのみである(empirical abstractions)。

この場合 Peters は「他人への同情はこのような理性のはたらきがあとで作用するまでは認められないものだ」という根拠はどこにもない。初期にも一種の感光性(sensitization)の作用があって、後に、それは理性的道徳的行動に影響する原理として作用する³⁷⁾と成長期の理性的判断の原点を積極的に主張している。以上、哲学と心理学の接点は容易に得られそうにない。主観的なものと客観的なものが道徳判断に要請されること自体を分離した、それぞれ独立した要素的なものと考えるのはどうであろう。主客未分化、つまり、原点での統合されたものが真実なのではないであろうか。

さて、W. James は自分の立場を radical empiricist (絶対的経験論者)という。³⁸⁾それは変化する現実、多元的な宇宙をそのままとらえようとするものである。与えられた直接体験がそのまま原点となっていなければ radical とはいえない。James は、われわれの既成の概念や知識以前の自己体験、vivid なものが出发点でなければならぬと説く、とすればこのような意識そのものもまた、流動的にとらえられねばならない。彼が意識の流れ(the stream of consciousness)としてとりあげる彼の心理学からの言葉も原体験をささえる重要な手がかりである。³⁹⁾つまり、「意識の流れはつねに変化する」(Consciousness is inconstant change.)ということ、どんな持続されたものもないこと、かつてすぎさったものは2度とかえってこないこと、現在、私たちは見ている、now hearing, now reasoning, now willing, now loving, now hating …なので

ある。くりかえし、くりかえし草が the same feeling of green を。また、空が青の感情をあたえてくれても同一の体験はありえない。ここでは概念化とはべつの次元である。personal consciousness の流れとしての変化する側面がみつめられねばならない。

かくして、James は意識の流れとしてとらえた。その意味ではカオスとしての現実が問われているといっただけであろう。Peters にも Kohlberg にも問われていない原点はなにを意味するのであろう。Kohlberg において発達段階説は6つの stage に説明され、最も高いものは普遍的倫理の原則 (universal ethical principle) であった。principle とは普遍的な原則としての正義、つまり、人権 (human rights) の平等、個としての人間存在の尊厳性の尊重である。

ここで Kohlberg のいう普遍的倫理はどのようにして得られるものなのか、彼によればそれは経験の反復とか人間関係のもつ相互性というものに由来するとのみいわれているにすぎない。最も高いとされる個としての人間存在の尊厳性はどのようにして得られるかは、いくら問われてもよい重要な問題である。個人の確立とか尊厳は法のレベルを超えた側面を内有していなければならない。人間関係を問うに Rogers, C. R. はいう。⁴⁰「他人がその感情や個人的世界を私に伝えられるように通路をひらくことは私の心を豊かにする……」「私は内的な非知性的な感覚 (non-intellectual sense) のひらめきを信頼する」「最も個人的なものは最も普遍的である」「生活が最良の状態にあるときは流動的で変動しつづけるプロセスであり、固定したものは何もない」と。これらの Rogers の信念としての言葉はなにを意味するのだろう。ここで、カウンセリングでいう「開かれた人間」も人格の最深部への問いかけを含んでいることは論をまたない。

結局、Peters や Kohlberg の考察している結論をより vivid に支えるもの、蘇生させるものは James の radical empiricism でないかと思う所以はここにある。上記 Rogers のいう言葉も人間関係を洗いつめたものとして、James 的なものをそのまま受け継いだ面があるといえよう。個人が各段階をたどって発達するというのは誰も否定するものではない。しかし、Peters の sensitization (感光性) という、やや理性的受け皿で、一面的に解決するのも説得性にかけるきらいがある。

James にとっては、生活の (意識の) 厚体験が出発点であり、それを離れては意識の残照も抹殺してしまうことになる。真実は「私が……を意識している」であろう。純粋な原体験意識といったらよい。それらをもとにして Piaget 的な、Kohlberg 的な、Peters 的な反省思考が構築されることになるが、事実、それは至当なことであろう。ただ、James 的にいうなら (あるいは、James の radical empiricism を拡大していうなら) ①幼児期においても、その後のすべての段階においても「意識の流れ」が存在すること、②Kohlberg の段階説の前にも「意識の流れ」が地殻をささえるマントル層のように存在していること、③道徳判断を考察するといっても、苦痛、罰、報酬、道徳善悪のような事象のみをとりあげるのみでは充分といえないのではないかということ、少くとも、他の事象 (芸術、宗教、科学…) との関連はどうなるのであろうか。④意識の流れ的なものより抽象化され、記憶化され、構成された道徳判断等は生活にとっては第1義的に大切なものであろう。しかし、各発達段階とも、James のいうような意識の根元性を忘れてはならない。特に、第6の段階ではどうであろう。なぜなら、個人の尊厳とか、積極的な相手への問いかけ (平等観) などは真実性の根拠が、または、それをささえる母体が常に問題とされねばならないからである。一方、真実性は「自然」をもとにして考える以外になにがあるであろうか。いわゆる私と自然とのやりとりである。鳥が鳴いて、花が咲いて、人が来て……すべて James の radical empiricism の地平以外に真実の尺度は何辺にもない、ということ。したがって、尊厳とか平等という抽象性に近い概念は自然にもどること、意識の流れに一度もどることで、一層それが強化されるということ。いわば、一種の道徳的カタルシスがそこに積極的に認められてよいのではないか。

以上は①～④まで Peters—Kohlberg を比較考察するうちから、自ら要請されるままのものを提示したにすぎない。附言するなら、④の根元的問いかけ (意識の流れへの問いかけ) は特に再考熟視の内容であり、今後の一層の課題である。因みに、①、②についても Fröbel の言葉が示唆するものを考察することによって、自覚されない幼児の存在を改めて James 流に問わねばならぬであろう。「然しながら、此所に幼児期だけは特に大切であると言わねばならない。何故ならば、この時期は、周囲の人々や外界の事物と結合し発達し、或い

は人々や事物を解明し理解し、その内部の本質をとらえるための最初の出発点を含んでいるからである」⁴⁰⁾以上の Fröbel の言葉は「萌芽としての幼児、児童期」を確定するものであり、それが、人間存在の芽であり、全体的統一的にすべてが直観されているという。したがって、それも James の「意識の流れ」の内有する意味内容を、別の角度から示しているといえないであろうか。James 流にいうなら、経験的カタルシスが人間存在と一切の判断を永遠化せんとする唯一の絆であると。

このように Kohlberg の提示した理論から、道徳性を問う課題はさらに哲学的追究を要し、同時に応用性としての教育心理学的アプローチも重視されてくるだろう。これからの日本の道徳教育としてのあり方を問う中に、Kohlberg 理論の役割を James 等いろいろな形でさらに追究していくことが、今後の課題ともいえよう。

—附記—

〔I〕の Kohlberg 考察は本学児教卒、福崎淳子君の新進気鋭の炯眼によるものであり、よって〔II〕の比較考察ができた。協力を謝する。 —鈴木—

—註—

- 1) 中里至正：道徳的行動の心理学，有斐閣選書（東京），1985，pp.24～28 なお研究方向の分け方として，3方向に分ける研究者もいる。山岸は①精神分析理論 ②社会的学習理論 ③認知発達理論，大西は①段階説 ②類型説 ③社会学習説に分けている。
- 2) 鈴木孝：現代イギリスの道徳教育論(1)―R. S. Peters の場合―，東京家政大学研究紀要，26 211―218 (1986)
- 3) 中里至正：1985，p. 26
- 4) 久松潜一監修：講談社国語辞典，講談社（東京），1966
- 5) 山岸明子：道徳判断に関する Kohlberg の理論とその発展，心理学評論 vo1. 1. 20, No.4. 348 (1977)
- 6) Kohlberg, L. : From Is to Ought : How to commit the naturalistic fallacy and get away with it in the study of moral development, In mischel, T.(Ed), *Cognitive development and epistemology*, Academic Press, 1971, 内藤俊史訳：道徳性の発達と教育，永野重史編，新曜社（東京），1985，p. 6
- 7) Kohlberg, L. & Turiel, E. : Moral Development and Moral Education, In Lesser, G. (Ed), *Psychology and Educational Practice Chicago* : Scott Foresman, 134. (1971)
- 8) Ibid. 439
- 9) Kohlberg, L. : The Philosophy of Moral Development, Eassay in moral development, vol. 1. Haper & Row, San Fracisco, 409～412. (1981) [Carter, R. E. : Appendix in Demensions of moral education, University of Toronto Press, 203～206 (1984)]
- 10) Kohlberg, L. (1971) 内藤俊史訳 (1985) p. 3
- 11) Carter, R. E. : Demension of moral education, University of Toronto Press, 1984. pp.212～213
- 12) Lee, C. L. : The concomitant development of cognitive and moral mode of though : A test of selected deduction from Piaget's theory, *Genetic Psychology Morograph*, 83 93～146. (1971)
- 13) 山岸明子：ユールバーク理論とその後の発展，永野重史編 新曜社（東京），1985，p. 196
- 14) 同上 195
- 15) Carter, R. E. : 1984 p. 67
- 16) 鈴木孝：213 (1986)
- 17) 同上 215
- 18) Peters, R. S. : Moral development : A plea for pluralism, In Mischel, T.(Ed), *Cognitive development and epistemology*, Academic Press, (1971) 上野直樹訳 新曜社（東京）1984 pp. 131～132
- 19) Kohlberg, L. : Early education a cognitive-developmental view, *Child Development*, 39 1016 (1968)
- 20) Kohlberg, L. (1971) 内藤俊史訳 1985 p.55
- 21) 同上 p. 55
- 22) 同上 p. 54
- 23) 同上 p. 51
- 24) Peters, R. S. (1971) 上野直樹訳 (1984) pp. 156～157

- 25) 同上 p. 151
- 26) Carter, R. E. 1984, p. 71
- 27) Denney, N. W. & Duffy, D. M. : Possible Environmental Causes of Stages in Moral Reasoning, *The Journal of Genetic Psychology*, **125** 277~283 (1974)
- 28) Ibid 282
- 29) Kohlberg, L.(1971) 内藤俊史訳 (1985) p. 55
- 30) 同上 pp. 55~56
- 31) 同上 p. 51
- 32) 同上 p. 34
- 33) Papoušek, M. & Papoušek, H. : Musical Elements in the Infant's Vocalization : Their significance for Communication, Cognition, and Creativity, *Advances in Infancy Research*, vol.1. (1981)
- 34) 鈴木孝 216 (1986)
- 35) Carter, R. E. 1984, p. 55
- 36) 鈴木孝 211 (1986)
- 37) 同上 215
- 38) James, W. : The will to believe, preface
- 39) James, W. : Psychology, (briefer course) Charter 2. なお同書の序で, Allport, G. W. も微妙な人間心理への James の取扱いかたを一度は積極的に問いなおすことだけのことがあると説いている。
- 40) Rogers, C. & Stevens, B. : Person to Person Real People Press, 1967
- 41) フレーベル : 人の教育 山原訳 玉川大学出版 (東京) pp. 55~56